

# 真野北村の「庚申講」

—三〇〇年繋がってきた小さなひとつのコミュニティ—

成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長

加藤

賢治

## 真野北村の「庚申講」 — 三〇〇年繋がってきた小さなひとつのコミュニティー

成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長 加藤 賢治

Name:

Kenji KATOH

Title:

Mano Kitamura's "Koshin-ko" (庚申講):  
One Small Community Closely Connected for 300 Years

Summary:

In the Mano Kitamura district of Otsu City there is a "Koshin-ko" (庚申講) that has continued for 300 years. We will clarify the history and significance of "Koshin-ko" and consider the role and future of this small community in the present age.

大津市真野北村地区に三〇〇年続いてきた「庚申講」という「講」が存在する。「庚申講」の歴史と意義を明らかにし、現代におけるこの小さなコミュニティの役割とこれからのあり方を考察する。

## はじめに

二〇二〇年の早春、中華人民共和国湖北省武漢市から発症したといわれる新型コロナウイルス(COVID-19)の拡大が収まらず、日本国内でも新型コロナウイルスの感染が広がり始め、同年四月七日には政府が一部の都道府県に緊急事態宣言を発令、県境を超える移動や人々が複数人集まる活動、夜間の飲食を伴う会合など、これまで普通に行われていた様々な活動を自粛しなければならないという事態となった。

滋賀県内も全国の動向に合わせ、教育機関においても、学校内の立ち入りまでが制限された。我々は、自宅において、インターネットを使ったオンラインでの授業運営の方法を学ぶことや、学生とのメールでのコミュニケーションなどの対応に追われた。しかし、人間は家の中という制限された空間では耐えきれず、朝夕のちよつとした外出(散歩)が日課となった。

かつて、近江国においても例外ではなく、伝染病の恐怖に怯えた時期があり、天然痘、コレラ、スペインかぜなど、大きな被害を伴った経験を持つ。しかし、筆者は誕生して半世紀を少し超えたが、それらの渦中に巻き込まれたことは無い。過去の日本人はどのようにして伝染病という災いを逃れてきたのであろうかと思いつながら、何事もないように流れる真野川の水面や、琵琶湖真野浜の細波、道端に咲く野草、元気なカラスや小鳥たちを眺めながら歩いた。

ある日の朝、真野の新しい都市計画道路の道端に大木が数本集まる鎮守の森のような雑木林があり、その横に真新しい木製の板塀に囲まれて佇む小さな一基の石塔を見つけた。石塔は高さ約九十センチ、一辺が約十センチの四角柱で、表面がザラザラした御影石である。よく目を凝らして見ると正面に「庚申」という二文字が浮かび上がった。

(写真1・2)。



写真1 真野の都市計画道路の端にある庚申塔

これは間違いない無  
く庚申塔である。

民俗学に興味を持つ者であれば、江戸時代に全国各地の集落で信仰された庚申信仰のシンボルであるということは誰もが認知している。筆者もその一人なので、この石塔の文字を



写真2 真野澤村の庚申塔

確認した時、自分が居住する足もとの真野地域にもこの信仰があったのだと興奮した。

この論考は、真野地域の旧字で今も継承されている「民間信仰（講）」についての記録である。以下に詳細を述べたいと思う。

## 第一章 庚申信仰とは

### (一) 庚申信仰の概略

庚申信仰の「庚申」とは、干支えといわゆる十干甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸と十二支子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の六十種類ある組み合わせの一つである。暦の中では、「庚申」を含む六十種類の干支は、六十年に一度、六十月に一度、日で言えば六十日に一度巡ってくるように設定されている。壬申じんしんや戊辰ぼしんなどもその一つ

で、その年に勃発した反乱や戦いくさの名前となっている。その中でも庚申という干支は様々な伝説とともに、江戸時代には特別な日として扱われてきたのである。

元は中国の道教思想に由来するといわれるその伝説とは「本来人の体には、三戸さんしの虫むしという三匹の虫が住んでおり、その人が行った悪事を記憶して、庚申の日にその人が眠ると口から出て、天帝に告げ口をして寿命を縮める」というものである。「虫の知らせ」「腹の虫がおさまらない」などという言葉もここからきている。江戸時代の人々は、この日に眠るといけないということで、庚申の日にみんなが集まり、お互い眠らないように工夫をした。その数名の集まりを庚申講こう、その行事を庚申待まちと呼び、徐々に宴会が催されるなど娯楽性も加わって一般化していった。

さて、この庚申信仰は具体的にどの様に何時ごろ日本に入ってきたのであろうか。庚申信仰の研究は、路傍みちかたに佇む、無数の庚申塔と呼ばれる石塔の存在をきっかけに、学者や多くの在野の郷土史家による地道な研究の成果がある。その中で、窪徳忠氏くぼとくちゆう（一九二二—二〇一〇）は『庚申信仰の研究』と題した著書によって民俗学研究的領域としてまとめあげた。

### (二) 庚申縁起

特筆されるのは、窪氏が『庚申信仰の研究』に掲載した「庚申縁起」と呼ばれる三十三編に及ぶ文書

である。それらは、窪氏によって全国から集められたものであるが、表現が似ているものなど多数あることから、大阪四天王寺の庚申堂縁起をもとにしていとも考えられるという。

その「庚申縁起」を要約すると以下の通りである。第四十二代文武天皇の時、大宝元年庚申の年の正月七日庚申の日に四天王寺行法尊記上人のところに、年の頃十六、七の童子が現れ、この寺が日本における仏法最初の霊地であるので、帝釈天の使として、庚申の法をここを拠点にあまねく広めよという勅旨を持ってきた。

庚申という日は、年に六度あり、年の初めの庚申は、地獄道の苦患を免れ、第二度目の庚申は餓鬼道の苦しみを逃れ、第三度目の庚申は、畜生道の苦を逃れ、第四度目の庚申は、修羅の苦を逃れ、第五度目の庚申は、人間の八苦罪を滅し給う。現世の災難、後世の苦しみを助ける。第六度目の庚申は天上の五衰体没の苦しみを救わんがためである。

庚申の日は、精進潔斎して、申の刻午後四時から南の方向につくった棚に、捧げ物をする。灯明をあげ、香を焚き、色よき花をたて、珍しい菓子のお供えをし、夜半に丸い供物と御酒とを捧げる。その夜は、荒い雑談をせず、腹を立てず、欲を言わず、男女の事を思わず、四足二足五辛の類を食べてはならない。

庚申の夜、もし眠るならば、三戸の虫が害をなすという。人の身のうちには三戸九虫という十二種

の虫がいて、この虫の仕業で、癩狂・癩瘡・狂気の病となり、あるいは盗賊悪党の心ができ、喧嘩口論となってその身を失う。

・この虫を退治するには、「ほうこうし、ほうぢょうし、みやうじし、しつにうやうてい、こりがしん」と南に向かつて拝み、三度唱えること。

・『夜もすがら 我はねざるの 此の床に ねたるもねずぞ しんはまさるぞ』と歯を鳴らし、三度唱えなさい。これまでのことが心の中を清浄にする大善根である」と童子が言つて青面金剛となつて姿を消した。

・暁、寅の刻（午前四時）、鶏が鳴を待つて、三十三度礼拝をしなければならぬ。

・庚申待ちは、三年で十八回行い、三年目には供養をしなければならぬ。供養とは道のほとりに塚をつくつて、四方正面の卒塔婆を建て、供物をする。ことで、往來の旅人もこれに施しをすること。そうすれば七難即滅、七福即成のご利益がある。

この「庚申縁起」をもとにして、近世、全国的に流布され各地で多少形や規模は変化しながら、戸主による集まりを庚申講、夜を通しての礼拝や遊興を庚申待ちと呼びながら現在に一部が伝わっている。

### (三) 庚申信仰の起源と広がり

では、どのようにこの庚申信仰が広まっていったのかについて考えてみたい。その考察については、様々な見解があるものの、窪徳忠氏は『庚申信仰の研究』の中で、「江戸時代に広く一般に庚申信仰が

普及した大きな原因の一つは、修験者の鼓吹にあつたように思われる。」と今後の研究課題として言及している。

その課題に対して筆者が注目しているのが、三井寺の長吏で仏教文化研究者でもある福家俊彦氏の見解である。福家氏は、「大津絵の誕生と三井寺別所の宗教文化圏」という論考の中で、三井寺とその周辺に位置する三井寺別所での大津絵師の活躍と彼らに描かれた青面金剛についての考察がなされている。そもそも初期に描かれた大津絵には仏画が多く、それは、仏教諸派の高度な仏教学に基づくものではなく、念仏聖や修験者が流布した仏教や神道、道教などが混じり合った民間信仰であり、描かれた仏画は阿弥陀仏や大日如来、地藏菩薩や観音菩薩であり、それらは念仏講や日待講や月待講、地藏講や観音講などの本尊である。そして、現存する数から最も多く描かれていたであろうと思われるのが青面金剛であり、それが庚申信仰の守り本尊であると述べている。

福家氏は、「窪氏が室町後期以降に日本の庚申信仰を全く仏説化したのは、円珍の系統を引く、園城寺の加持祈祷を専門とする僧侶で、庚申縁起をまとめ上げて、本尊の青面金剛像とともに三井寺ゆかりの修験者などによって全国に広めていったと指摘している」としながら、『園城寺伝記』に庚申信仰の典拠となつた「庚申経」が所収されていることなどを根拠に庚申信仰の起源が三井寺にあると語っている。

青面金剛とともに大津絵によく描かれるものに「十三仏」というものがある。これは、十三仏信仰に基づいて描かれたもので、不動明王、釈迦如来、文殊菩薩、普賢菩薩、地藏菩薩：最後に虚空蔵菩薩が並び、人間の死後の魂が成仏するために七日ごとにこの世に残つた親族が礼拝する対象の十三の仏様をいう。この十三の仏様を全て一枚の紙に描いた大津絵は、自分の死後の仏事を予め生きている間に行うという逆修仏事のためにあつたという。そう考えると、先述の庚申縁起の中に出てくる年に六度ある庚申の日に地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道の世界を一つずつ祈つて死後の苦しみから逃れようとするのは、十三仏信仰と同じ逆修仏事と言えるのかも知れない。

ともあれ、庚申信仰は、江戸時代にあつて十三仏と同じく、死後の自分の魂の安寧を願つて、定期的な熱心に祈り続けてきたという一つの姿を見ることができるといえる。そして、大津絵に描かれた青面金剛や十三仏とともに、庚申信仰は広く全国に流布されたのであろう。

## 第二章 真野北村の庚申講

### (一) 北村庚申講の発見

この章は、偶然筆者がコロナ禍の散歩によって発見するに至つた庚申塔について具体的に話を進めていきたい。筆者がまず思つたのは、この真野地域で、今も庚申講が存在しているのであろうかということ

である。そこでこの地域の歴史文化に詳しい真野澤地区の川中常夫氏を訪ねた。

川中氏によると、真野の澤地区にはかつて庚申講が存在したが、無くなってかなり年月が経つとのことであった。ただ、

同じく真野の北村地区の願生寺（浄土宗西山禅林寺派 大津市真野四丁目）の境内に北村の庚申塔があるとの教示があり当寺を訪ねた（写真3）。願生寺名譽住職根来旭氏から、真野北村地区では今も講が行なわれていると聞きおよび、その時の講の当番をされている濱本イク子氏を紹介いただいた。

ここで、北村集落についての概観を説明しておきたい。

北村集落はJR湖西線の小野駅と堅田駅の間的小野駅寄りの線路沿いという、生活するのに便利なおりに位置するため、戦後の経済成長期に新興の住宅が増え、約五十軒が真野北村自治会を形成している。その内の十四軒は、檀那寺を願生寺、氏神を真野神田神社として、共有地を共同管理し、江戸時代から明治、大正期の伝統を受け継ぐ旧集落（北村集落）、「北村会」を構成している。そして、その中で、



写真3 願生寺境内の真野北村の庚申塔

庚申講を継承しているのが以下に述べる五軒の家である。

## （二）北村庚申講の概略

北村の庚申講は、五軒の講員で構成され、庚申の日に近い日の夜に講が開かれているとのこと。講員は、夕食を済ませてから、十九時ごろ当番の家に集まる。座敷には、庚申講の守本尊である青面金剛が描かれた掛け軸がかけられ、色花が供えられる。掛け軸に手を合わせ、お下りの飲み物とお茶菓子を共食しながら、二時間程度、よもやま話をして解散するという。

二〇二〇年九月十八日、真野北村の庚申講に参加した。

この日は講員でこの会の当番である濱本イク子氏の自宅で十九時半から講が行われた。

講員は、

濱本正雄氏（八十六歳）

濱本傳氏（七十九歳）

谷正昭氏（六十四歳）

濱本昌嘉氏（六十二歳）（この日は妻の粮子氏が出席）

濱本イク子氏（七十七歳）

の五名（五軒）である（写真4・5）。

臨時につくられる祭壇は、写真にある通り、掛け軸は四天王寺と書かれた文字とともに青面金剛が描かれた比較的新しいもので、もう一つは愛宕講のものである。ここに集まる講員はこの講を基本的に「庚申講」と呼んでいるが、四年ほど前から愛宕講も重

ねて行われている。

濱本正雄氏と濱本昌嘉氏は愛宕講と庚申講の両講の講員であり、濱本イク子氏は

元々愛宕講のみの講員であった。現在は、愛宕講も庚申講も上記の五名のみが受け継いでいるという現状であるので、庚申の日の前後に行う庚申講と愛宕講を同時に行うようになったという。

この講に伝わる小さな木箱が二つある。一つ目の木箱の蓋の裏には、「安政五年戊午年 十二月庚申講中」と記され、その箱の中には講が開かれる月とその月の当番の講員の名前が記入された「月取表」という紙が台帳のようにまとめられている。最も古い月取表は、正徳五年（一七一五）のものがあり、綺麗に保存され綴られていた。講の言い伝えでもこの年からこの講は始まったという（写真6）。



写真5 庚申講の様子 二〇二〇年九月十八日



写真4 庚申講の祭壇 二〇二〇年九月十八日の庚申講

もう一つは愛宕講のものと伝わる箱で、中には愛宕講と大師講の帳面が入っており、当番の人物の名前と供物の記録や、講で行われたことなどが記されている。箱の裏には、寛文六年（一六六六）という庚申講よりも古い日時が記されていた。

北村の庚申講は、始まりの時間がかつぱりと設定されているだけでなく、当番宅に到着順から、祭壇に手を合わせ徐々に始まる。

毎回は、日常生活における話を中心に、十四軒あるという北村会の話や、檀那寺の行事の話などが話されているようである。今回は、筆者が入ったこともあり、少し以前の庚申講の話聞くことができた。

以前は、七庚申講ななごうしんこうと言って、盛大に餅つきをしたという。また、三十年ほど前は婦人会的な雰囲気があり、女性たちの楽しい語りの場であった。北村には念仏講がついこの前まで行われており、檀那寺である願生寺にこの講の講員の他、北村会の全員が集まっていたという。

平成十二年



写真6 北村庚申講の「月取表」とそれが保管されてる木箱

(二〇〇〇)に誰かによって書き留められた資料を見せたいことができた。そこには以下のようなことが書かれている。

#### 北村七庚申講

(平成十二年十二月現在 発起より二八五年)

発起年：正徳五年（一七一五）

← (中御門天皇代 徳川七代將軍家継代)

庚申講塚建：明治三年（一八七〇）

← (伊太郎、源次郎、嘉平治、嘉郎、傳治、武介、友七)

庚申塔建立：明治四十三年（一九一〇）四

#### 二五

← (門次郎、浅吉、嘉一郎、熊次郎、清次郎、傳治郎、伊之助、鶴松)

← 現地 東照山願生寺境内に移転：昭和四十一年

(一九六六) 三

現在に至る（※庚申講発起年より平成十二年

(二〇〇〇)で二八五年を数える）現在北村会住民でおまもりをしている

この日の北村庚申講は、二十一時半、ちょうど始まって二時間ほどで解散となった。

#### (三) 東京都練馬区の庚申講

江戸時代以降に広く全国で行われていたという庚申講であるが、一般的にはどのようなことが行われ

る講なのであろうか。

先述した窪徳忠氏の『庚申信仰の研究』には多くの庚申講の当時の実態が報告されているが、前述のとおり、北村の庚申講が庚申塔を願生寺に移転させた頃（昭和四十年ごろ）の事例として、東京を中心に関東の郷土史家として知られる平野実氏が、東京都練馬区で行われていた庚申講（当地では庚申待と言われている）を取材しているので取り上げてみたい。

平野氏は、著書『庚申信仰』<sup>註3</sup>でその庚申講の様子を記しているので、以下に要約を紹介する。

江戸時代から続いているという昔の小字集落で受け継がれてきた講で、かつては小字全体が講に参加していたが、現在（当時）では十軒となっている。庚申の夜は、当番の家に集まり、座敷に掛け軸をかける。掛け軸の画面は、日月が瑞雲の上に描かれ、中央に六手の青面金剛の像が、そしてその下に三猿と雌雄の鶏が見える。この講は仏式であり、線香は立てるが、勤行や呪文、その他の唱え言などは無い。夕食に蕎麦が出され、食後は雑談となる。旅行へ行った話や、その時の失敗談、近くの嫁取りの話や、嫁の器量や芸事の話、そして猥談ともなると盛り上がる。その間には、茶や菓子が出され、信仰という雰囲気は全く無い。時間が経つと、軸の前に供えてある徳利二本の酒を下げて、少しずつ分けて飲む。深夜十二時頃になると白い米のご飯に、豆腐の味噌汁という夜食が出される。

楽しい夜食が終わると、この庚申講は夜明けを待

たずにお開きとなる。かつては朝まで継続していただろうが、それを知っている講員はいない。

ここでの庚申さんは、口や目や耳などの病気を折ると治してくれるという。しかし、庚申さんがどういう仏さんなのか、あるいは神様であるのか、また、なぜかつては徹夜をしていたのかという問いには、明確な答えや、信念を持っている講員は一人もいない。ただ、庚申の夜に男女が交わってできた子供は盗人になると言われているので、それを避けるために一晩中寝ないでいると答えた者があったという。

この夜の費用は、当番の家が酒を用意する他は、米を五合ずつ各家から集めてまかなうという。

以上が、練馬区で当時行われていた庚申講（庚申待）である。平野氏は、これは一例であるとしながら、同著で「庚申信仰の実情」という項で、関東地方の他の庚申講の様子も伝えている。

#### （四）全国各地の庚申講

以下は、平野氏の調査の要約である。

他の地域で見られる庚申講は、庚申さん、庚申待などとも呼ばれ、それを開催する頻度は、年に一回のところや、年のはじめと終わりの二回、ないし七回など、様々で、庚申の日に限らず都合の良い日に行われていたりする。

出席者は、元来男性だけであったが、男女が混ざった講や、女性のみのもあった。講を行う時は、仏式の場合は仏壇のある床の間などに、青面金剛や帝釈天の掛け軸を掲げ、神式の場合は猿田彦の軸をか

ける。これに団子、菓子、花、線香などを供える。一同がそろると、勤行を行うところや般若心経を唱える、また庚申真言を唱えるなどこれも様々であったというが、現在（当時）では、形式的に合掌したり、拍手を打って拜むだけになっている。

それ以降は雑談となるが、「話は庚申の晩に」という諺があり、庚申の夜は、基本が徹夜であるから、十分に時間があるので、その時にゆっくり話そうということである。

また、この晩を利用して、無尽や積立金の集金をする、慰安旅行の計画を話し合うこともあった。明治時代までは賭博も公然と行われていたという。賭博が現代のように厳しく取り締まりがなかった頃は、庚申講の他に、月待講や、日待講、などでも賭け事が行われていた。

そして肝心な信仰としての庚申さんの御利益は、第一に長寿、第二に病の完治、第三に家内の繁栄、第四に豊作、第五に豊漁、第六に商売繁盛、第七に金銭に恵まれると言うのが一般的だという。

また庚申講の禁忌については、肉食や、同衾が最もよく言われ、その他、裁ちものをしてはならない、出産のあった家では講をしてはならないなどがある。

江戸時代以降、庚申講は広く全国に分布し、明治になって初めて行くとともに多く見られたという。

#### （五）庚申講における七という数字

北村の庚申講で話されていた中で、七庚申の話題

があったが、この庚申講における七という数字について、先述の平野実氏の『庚申信仰』と、飯田道夫氏の『庚申信仰 庶民信仰の実像』<sup>註4</sup>に詳しく記されているので、要約してみたい。

基本的には、七庚申を盛大に祭るという慣習が一般的で、ここから七という数字が特に注目されると考えられる。七庚申とは、一年間に庚申の日が七回ある年をいう。庚申の日は十干十二支の六十種類の組み合わせにより、六十日に一回まわってくる。したがって、概ね二ヶ月に一度庚申の日が来る計算になるが、そう単純ではない。江戸時代の暦は太陰暦（旧暦）であり、二十九日の月と三十日の月に分かれ、約三年に一度の閏月などが設定されることもあり、多少変則的に七回庚申の日が巡る年がある。また、年に五回のみ庚申の日がやってくる年は五庚申と呼ばれるが、七庚申の年より回数はかなり少ない。

慶長六年（一六〇一）から明治元年（一八六八）までの二六七年の間に、七庚申の年は、三十九回あり、五庚申の年は十七回である。七庚申の年は平均すると七年に一回やってくる計算になるが、先述の通り、不規則である。しかしながら、七庚申は珍しいということ、特に盛大に祭を行うという慣習が生まれたようである。ちなみに五庚申の祭りは特にみられない。

七という数字についても少し述べてみると、「庚申の夜には、七色菓子を供える」「庚申講は七人待衆という七人で結成する」「庚申の夜は、七度勤行を行う」「夜食を七度とる」などがあり、窪氏の庚

申信仰における供物の報告にも「七種の色ばな」「うどん・油揚げ・にんじん、ぜんまいのあえもの・天ぷら・麩など七種の御馳走」「七個の団子」「七個の餅」「七個の握飯」など七に関する全国各地の供物が多く紹介されている。ただ、窪氏はなぜ七なのかという見解は述べていないが、飯田氏は、七という数字について天台宗との関わりを指摘している。七の尊重は北辰崇拝に由来し、北斗七星もそこに含まれる。比叡山延暦寺が北方鎮護を自認しており、山頂の「七星降臨処」を聖蹟としている。また山王諸社が「山王七社」としてまとめられることも無視できないとしている。

民俗学者五来重氏も、その著書『<sup>註</sup>』で「庚申待には七色菓子あげ、庚申待は暮七ツ時（午後四時）から明七ツ時（午前四時）までといい、功德は『七難即滅七福即生』という。…中略…そのいわれは、『庚』が十千の七番目だと言われるけれども、これは猿を（申）をまつる日吉（比叡）山王社が上七社、中七社、下七社の二十一社から成ることによるものである」としている。

庚申信仰の広がり、天台寺門宗総本山三井寺の修験者によるものとの指摘もここであらざることもあつた。かもしれない。

### 第三章 講と「小さな」コミュニティ

#### (一) 庚申講の目的の変化

現在真野北村の庚申講にはどのような祈りが込め

られているのであろうか。柳田國男は、日本における庚申信仰は、最も慎しみ深いもので、心と身を清めて、悪念を遠ざけ、一夜を神の前に参籠することによって、団体共同の幸福を得ようとしていたと解釈している。

家族の延命長寿、五穀豊穡、疫病退散など、講員とその家族という共同体の幸福を祈ってきたに違いない。それも三〇〇年の歴史を持つのである。三〇〇年以上、二ヶ月に一度講員の先祖は集まり、親交を深めると同時に過去・現在・未来の幸福を祈ってきたのである。

先述した窪氏の三十三編に及ぶ「庚申縁起」の中には、逆修的な自らの魂の行く末を案じて祈ることや、三尸の虫を体内から出さないことで、自らの寿命を少しでも長く保ちたいという、非常に個人的な祈りをみんまで共有するという内容がみられた。庚申信仰が広まりを見せた江戸時代初期には、柳田が言うような共同体の幸福のための祈りというわけはなかったようである。

しかし、時代が降るとともにその内容は地域ごとにまた時代ごとに変化し、昭和期の東京都練馬区における平野氏の報告では、六道における死後の魂の行く末や三尸の虫の話は一切なく、真野北村で行われている内容と大きく変わらないようにも見えた。

元来、庚申講には、延命長寿などの祈りの部分と、集団で行う娯楽的なのが共存してきたと考えられるが、明治以降、近代に入ると信仰の面が次第に薄れ、共同体の楽しみのために盛り上がったよう

に見える。そして、高度経済成長期以降は、都会への通勤や夜の残業、夜間の娯楽が一般化するなどし、一時は家を守る女性の楽しみとして庚申講に女性が集まることになる時期もあったようだが、近年は、その講の役割も見えなくなり、ほとんどの庚申講は姿を消していった。

#### (二) 真野北村の庚申講の一夜

二〇二〇年九月の取材時に語られた言葉を以下に記す。

「息子がこれが続けてくれるか全く不明。」

「やめると不幸があったと聞いている。」

「おしゃべりが好きなのでこんな機会があるのは嬉しい。」

「三〇〇年も続いているとは信じられへんな」

「やめるのは簡単。ご近所が寄り合うことは、この庚申さんを除いて今はほほえない。寄っているといろんな話ができるので良いことだと思おう。」

「庚申講は続かへんな。お寺の仏さんごともそうや。

若いもんがしょうらへん。墓守るんも大変や。体いわたしらできひん。墓のことわしらが死んだら何もできひん。」

「庚申さんも説明のしようがないのでどうして良いかわからへん。コロナのことで、葬式も省略されている。そうはいくもの愛宕さんの横の地蔵さんはいつもふみえさんが面倒見てくれている。ありがたいことや。」

「昔は観音講が楽しかった。今はお葬式も家でしい

ひん。セレマでやるので、ご詠歌をあげることも無くなった。」

「正直、庚申さんは若い人に続けてもらいたい。」  
「今まで庚申さんに関心がなかったけど、こうやって取材してくればって、講の意味がわかってきた。昔はお母さんが行っていたので女性の講やと思っていた。わいわい集まっていたのが楽しかったとおばあさんも言っていた。」

「庚申さんでもできるだけのことしたら良いけど、どうしたら続けられるかわからへんな。みんな長生きしてください。」

「うちは嫁さんもあまり興味ない。掛け軸かけてみんな集まるだけの行事。何の意味があるのかな。」

月取り表によって、講が三〇〇年続いてきたと証明できる奇跡は、客観的に我々研究者から見ると大変貴重な話であり興味深く思うが、当事者である講員たちは、特にそれに大きな意味があるとも、大切な風習であるという意識もあまり無いようである。

ただ、この後、どのように講を継承していくのかという切実な心配があり、また、それは、講に限ったことではなくお墓の問題や、共有地の管理など、次の世代がどのように引き継いでくれるかについての危惧である。誰一人、この講が不必要であるという認識はなく、先祖が続けてきたことを絶やしてはいけないという気持ちと、講が存在すること、親戚でも無い五軒の家が、講でつながった地縁のコミュニティの大切さを強く感じていることは理解できた。

## おわりに（まとめにかえて）

今年の北村の庚申講は、新型コロナの影響で、五月と七月は中止となったという。濱本イク子さんは「九月はようやく開催できたが、なんとか今後も続けたい。」と申し訳なさそうに語られていた。庚申講の木箱が新調された安政五年（一八五八）は、コレラが日本に蔓延した年である。単なる偶然かもしれないが、疫病退散の意味を込めて新調されたのかもしれない。それはともかく、コロナ禍で、グローバルな社会システムの一部が機能しなくなる中で、家族という最小単位のコミュニティの大切さが叫ばれるようになってきた。

二〇二〇年の十一月にも講が開かれたが、そこでは、過去に起こった北村のある高齢者の徘徊象の経緯が語られ、行方がわからなくなった本人の家族とともに、周辺の人たちが様々に連絡を取り合い無事保護することができたという。また、近年は台風の被害が酷く、日常的に地震等も含め災害に地域で備えることが必要だ。高齢になると、夫婦だけでは何もできない。何かあったときに自分たちの存在をわかっている、すぐに対応してくれる地域の人たちの存在が必要だという当たり前のことであるが大切な話が出ていた。

現代の地域社会においては、自治会、いわゆる町内会の関わりについて自治会への未加入や、防災対策、空き家問題、高齢者の独居など、様々な問題が浮かび上がっている。自治会が機能して解決できる

ものももちろんあるが、一軒の家が、自治会だけでなく複数の繋がりを持っていることは重要なことである。

三〇〇年の伝統をどう引きつぐかという方法を考えるというよりも、庚申講のような、深い絆で結ばれた地縁のコミュニティも、一つの大切なコミュニティであるという認識を持って、今一度目を向けることが必要ではないかと改めて思うのである。

最後になりましたが、この取材にご協力いただきました北村庚申講の皆さん。そして、取材に同行いただいた大津市歴史博物館の和田光生学芸員、高橋大樹学芸員にこの紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

## 註

1. 窪徳忠『庚申信仰の研究 日中宗教文化交流史』一九六一年 日本学術振興会
2. 窪徳忠『庚申信仰の研究』一九六三年 帝国書院
3. 成安造形大学附属近江学研究所『文化誌「近江学」創刊号』二〇〇九年 サンライズ出版
4. 平野実『庚申信仰』一九六九年 角川選書
5. 飯田道夫『庚申信仰 庶民宗教の実像』一九八九年 人文書院
5. 五来重『石の宗教』一九八八年 角川書店



## 編集後記

一年前の前号の編集後記で、新型コロナウイルスの流行のニュースが連日報道されていることを書いていました。今も状況は好転することなく、日々、グラフや映像で視覚化された目に見えないものの脅威に対して新しい生活様式を実践しながらコロナ後の未来を模索しています。人との距離をとり、マスクで表情も読み取りにくい、それだけでも日常の暮らしやハレの日、お祭りや行事に多大な影響があります。この一年間は日常を自粛し、ハレの日の多くが縮小や中止となりました。日本の文化が凝縮され継承されてきたハレの日の「かたち」や暮らしの「かたち」、「ハレとケ」のありようが今後どのように変わっていくのか大変気がかりです。

本紀要では客員研究員と本学研究員からの論考三編を掲載します。

高梨客員研究員からは、愛知郡愛荘町・常照庵の木造不動明王二童子像の調査報告を寄稿していただきました。加藤研究員の論考は、大津市真野北村地区に今も続く庚申講の調査について、庚申信仰と三井寺や大津絵との関わりなどにも触れ、地縁のコミュニティの意義を考察しています。石川研究員は、東近江市五個荘の宮荘の取材と大学近郊の大津市仰木の取材および学生との活動について「近江の懐をめぐる4」というかたちで紹介しています。近江学の講座はこの一年間すべて中止となったため、「講座の報告」はありません。

編集担当 永江弘之

## 成安造形大学附属近江学研究所 紀要 第10号

発行日 令和3年3月25日

発行 学校法人京都成安学園 成安造形大学  
附属近江学研究所

T 520-0248

滋賀県大津市仰木の里東4-3-1

電話 077-574-2118

発行者 小寺善通

編集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 株式会社北斗プリント社